

## Toni Morrison の短篇“Recitatif”における人種と階層 —身体と「衣装」の間で

杉 田 和 巳

“The only short story I have ever written, ‘Recitatif,’ was an experiment in the removal of all racial codes from a narrative about two characters of different races for whom racial identity is crucial.”<sup>1)</sup>

出版された唯一の短篇、“Recitatif” (1983) について Toni Morrison は、それは “an experiment in the removal of all racial codes from a narrative about two characters of different races” であったと述べている<sup>2)</sup>。St. Bonaventure 保護院で8歳の二人の少女、Twyla と Roberta は出会い、その後およそ30年に及ぶ年月の中で何年か置きに偶然に4度の再会を果たす。一方が白人、もう一方が黒人、人種を異にする二人の少女は保護院での幼少時代の思い出を共有しつつ、人種や階層の違いから時に互いに反目したり、あるいはその絆を再確認したりする。Morrison が言うように、Twyla と Roberta は人種を異にするが、そのいずれが白人であり、いずれが黒人であるか、物語中では決して明らかにされない<sup>3)</sup>。“all racial codes” を物語から排除する、この点についてさらに Morrison は Elissa Schappell とのインタビューの中で、“I use class codes, but no racial codes.” (Schappell, 75) と語っているが、“Recitatif” においては、さまざまな社会的階層の違いを表象するコードを用いて、Twyla と Roberta の階層の相違が明確に主題化されているのに対して、“racial identity is crucial” であるはずの Twyla と Roberta の人種の違いは、例えば、両者の人種間対立などといった判り易い図式では物語化されていない。両者は確かに人種を異にするが、両者の関係が直接に人種間の緊張関係を物語るということはなく、あくまで両者の階層の違い、両者の反目、あるいは絆の背景に人種間対立の主題が見え隠れしている、と言える<sup>4)</sup>。

“Recitatif” において、人種という主題は、二人の主人公 Twyla と Roberta 自身のアイデンティティの問題でもなく、二人に共有されている St. Bonaventure 保護院の台所で働いていた Maggie という女に関する記憶という形で展開されており、二人が再会を果たす度ごとに重要度を増していくことになる。保護院での思い出を語る Twyla は Maggie の肌の色について、“She was old and sandy-colored and she worked in the kitchen.” (245) と述べ、その人種的アイデンティティについて曖昧に言及している。3度目の Twyla と Roberta の再会、公民権運動に端を発した人種分離政策是正のための強制バス通学に反対するピケの場面では、強制バス通学の問題にまるで無関心な Twyla に怒って、強制バス通学反対の立場を取る Roberta は、“You’re the same little state kid who kicked a poor old black lady” (257, 筆者強調) と政治的立場とはまるで無関係に Maggie のことを持ち出して Twyla を非難する。Twyla には Maggie が黒人であったという記憶がなく、Roberta の言を即座に否定する。“Recitatif” において唯一、その肌の色について言及される Maggie ではあるが、“sandy-

colored” という曖昧なコードで表象される。この点でも Morrison は最も明瞭で信頼性の高い人種的コード、黒人の肌の色について言明しない。

一方、4度の Twyla と Roberta の再会の中で、二人の経済的立場、社会階層の違いは明確な対照を成している。特に最初の出会いから1度、2度目と再会を重ねていく時、両者の階層の違いはそれぞれのドレス、「衣装」の違いで表象される。最も明確なコードである服装の他、それぞれの生活レベルを指し示すコードをまとめてここでは比喩的に「衣装」と呼んでおくが、特に Roberta の「衣装」の変化は顕著であり、社会階層や生活レベルが固定したものでなく、極めて流動的であることを示唆している。しかしながら、Twyla と Roberta の階層の違いは、幼少時の保護院での記憶に裏付けられた両者の絆を脅かすものではない。Twyla と Roberta が再会する時、両者の間の緊張関係を生み出すのは、常に Maggie の存在であり、トラウマ的な Maggie に関する記憶に関わっている。

以下、まず始めに人種的コードとしての身体性、肌の「黒さ」の問題について Morrison の考えをまとめ確認する。続いて階層的コードである「衣装」の問題から “Recitatif” における Twyla と Roberta の階層間格差について検討する。そして最後に、人種と（社会）階層の相関関係について、それぞれのコードである身体と「衣装」の対比のアナロジーとして論じる。

## 1

“Recitatif” では用いられなかった人種的コードである肌の色、「黒さ」について Morrison は、処女長編である *The Bluest Eye* (1970) の中で、白人中心の価値観が支配する社会における「黒さ」の問題を主題として取り上げている。*The Bluest Eye* の主人公の少女、11歳の Pecola Breedlove は貧困の中にあって、家庭は父 Cholly と母 Pauline の不仲で崩壊寸前、自身の容姿に劣等感を持ち、その肌の「黒さ」、醜さが自身の不幸の元凶であると思う。Missy Dehn Kubitschek が、“the black community’s internalization of white racist standards, and their effects on Pecola” (Kubitschek, 34) と指摘する、Pecola を疎外する黒人コミュニティ全体が、白人の美意識を内包しており、その価値観をして Pecola に「青い眼がほしい」と考えさせるのである。

Pecola を疎外する黒人コミュニティの支配的白人の価値観は、*The Bluest Eye* の第2章 “Winter” に登場する中産階級の Peal 家の少女、転校生 Maureen によって、視覚的にも言語的にも裏書きされている。小説の語り手「私」である9歳の Claudia MacTeer (Pecola の友人) は Maureen について次のように描写している。

“This disrupter of seasons was a new girl in school named Maureen Peal. A high-yellow dream girl with long brown hair braided into two lynch ropes that hung down her back. She was rich, at least by our standards, as rich as the richest of the white girls, swaddled in comfort and care.” (*The Bluest Eye*, 62, 筆者強調)

“high-yellow” である Maureen は肌の色も薄く、かつ黒人特有のドレッドヘアではなくて、“long brown hair” をしている。コミュニティの大人たちは Maureen を褒めそやすが、語り手の Claudia は Maureen のその「白人らしさ」に敵意を覚えている。ところが、Claudia の Maureen 描写には、

白人支配層による黒人の虐待をイメージさせる比喩、“two lynch ropes that hung down her back”が用いられており、コミュニティやそこに住む黒人たちの意識、価値観、言語、美醜の別といったものが白人支配層のコードで支配されていることを示している。

こうした白人支配層の価値観により、逆説的にはあるが、黒人コミュニティ内部における階層間の格差、対立が浮き彫りになる。南部出身の中流意識を持つ Geraldine もまた、そうしたコミュニティ内部での階層間対立を体現する人物である。息子 Louis Junior に誘われた Pecola が、自分のお気に入りの猫を家の中で愛撫しているのを見た Geraldine は、“You nasty little black bitch. Get out of my house.” (*The Bluest Eye*, 92) と白人が黒人を侮蔑する言葉で Pecola を家から追い出してしまふ。Geraldine にとって、貧しく醜い Pecola は、彼女がそうありたくないと思っていた南部での黒人の記憶そのものであり、“everything that she [Geraldine] is ashamed of, everything that whites use to despise African Americans” (Kubitschek, 34) だったのである。Pecola を取り巻く内部コミュニティ間の対立の背景に白人層の支配的価値、あるいはそれらに自ら価値を見いだしている黒人たちの自意識の問題が潜んでいることは、Pecola の母 Pauline によっても具現化されている。Cholly と出会い、南部から北部に移住してきた Pauline は、北部都市部のコミュニティになじめず、多くの時間を映画鑑賞に費やすが、その過程で白人を頂点とする美醜の意識を持つようになり、自分の容姿に劣等感を抱く。そんな Pauline は家政婦として働く裕福な白人一家 Fisher 家に愛情を持つようになる。Kubitschek は、Pauline にとって Fisher 家が “an alternate, fantasy-family” の役割をにない、“Pauline’s emotional loyalties lie with the white children rather than with her own.” (Kubitschek, 35) であると指摘する。第3章 “Spring” において、Fisher 家に母を訪ねてきた Pecola はコケモモの鍋をひっくり返して脚にやけどを負ってしまう。ところが、Pauline は Pecola を手の甲で殴ってしかりつけ、台所を預かる家内奴隷の黒人女がしばしば、主人の屋敷の台所を “my kitchen” と呼ぶのを連想させるように、Pecola が汚した床を “Crazy fool . . . my floor, mess . . . look what you . . . work . . . get on out . . . now that . . . crazy . . . my floor, my floor . . . my floor.” というように、“my floor” と何度も繰り返している。また、Kubitschek が指摘するように、驚いて泣き出し服を汚してしまった Fisher 家の女の子を “Hush, baby, hush. Come here. Oh, Lord, look at your dress. Don’t cry no more. Polly will change it.” と優しくあやす Pauline の姿は Pecola に接する態度と明瞭な対比を示している (*The Bluest Eye*, 109)。

父 Cholly により強姦されて妊娠した Pecola は、このままで学校に行けなくなると思い、コミュニティ内では変人と思われている占い師 Soaphead Church を訪ねて、「青い眼がほしい」 (“I want them blue.” (*The Bluest Eye*, 174)) と相談を持ちかける。容姿に劣等感をもち、自身の不幸の原因がその「醜さ」にあると思込んだ Pecola にとって、支配的な白人層の美の象徴、それが「青い眼」である。Soaphead にはもちこんだこと、Pecola の眼を青く「変える」ことはできない。物語の最後、第4章 “Summer” において、狂気の中で Pecola は、自分の眼が青くなった、「世界で最も青い眼」 (“The bluest eyes” (*The Bluest Eye*, 204)) に「変わった」と思い込む。Pecola を襲った狂気、そしてその悲劇性の源には、Pecola の黒人としての自己を否定しようとする衝動がある。Pecola が自己否定した自身の容姿、黒人性、その「黒さ」は、生来的なものであり、本来「交換できない」ものである。肌の「黒さ」を自己否定し、代替としての「青い眼」を希求する Pecola は、交換不可能な自身の身体性、その「黒さ」を叶うはずもなく「青い眼」を得ることで「白色化」したい、と願ったのかも知れない。

*Playing in the Dark* (1992) の中で Morrison は、移民国家アメリカにおいて、白人移民たちの自己形成は、白人でない黒人奴隷の存在、その肌の「黒さ」に恣意的な「意味付け」を实践することで獲得されたのであると指摘する。

“The slaves, unlike many others in the world’s history, were visible to a fault. And they had inherited, among other things, a long history on the meaning of color. It was not simply that this slave population had a distinctive color; it was that this color “meant” something.”  
(*Playing in the Dark*, 49, 筆者強調)

こうした「意味付け」(Pecola が理想として、支配的白人層の美醜の意識を内包し、「青い眼」を希求するのは、その逆説的な表象である)が、根拠なき黒人層に対する偏見やステレオタイプ像の多くを産出したのであり、移民国家アメリカにおいて、黒人(奴隷)の存在がある種の社会的「緩衝材」として機能したのであると Morrison は説く。Bonnie Angelo とのインタビューの中で、Angelo が “It seems hopeless if we can’t bridge the abysses you see between sexes, classes, races.” と述べたのに対して、Morrison は次のように答えている。

“I feel personally sorrowful about black-white relations a lot of the time because black people have always been used as a buffer in this country between powers to prevent class war, to prevent other kinds of real conflagrations.” (Angelo, 255, 筆者強調)

“sexes, classes, races” の中で特に人種問題を乗り越えがたいものと悲観的に捉え、“sorrowful about black-white relations a lot of the time” と述べる Morrison は、“Recitatif” においては戦略的に人種的コードである肌の「黒さ」を Twyla と Roberta の物語からは排除しつつも、“sandy-colored” な肌をした人種の曖昧な Maggie を配して、異なる階層に属することとなった二人の主人公の再会を人種間の緊張関係を背景に描き出している。

## 2

Morrison が “I use class codes, but no racial codes.” と述べているにもかかわらず、Twyla と Roberta の人種的アイデンティティを決定しようとする時、多くの批評家が主人公らの階層そのものを人種的コードとして用いており、その妥当性も議論となっている。例えば、1970年代の Twyla と Roberta の2度目の再会の場面、IBMに勤める夫を持つアッパーミドル階級の Roberta と、消防士を夫に持つ労働者階級の Twyla の対比を「人種的」に解釈し、Roberta は白人であり、Twyla は黒人であると考えられるとする読みに対して、Morrison は Roberta の夫については “IBM made efforts to recruit black executives” と述べ、Twyla の夫の職業である消防士については、“Morrison has remarked on the racially exclusionary practices of the firemen’s union” と指摘している (Baillie, 166)。Valerie Smith が、“readers’ generalizations about race may actually apply as easily to socioeconomic status, and vice versa” (Smith, 97) と指摘しているように、人種と階層を安易に

結びつける解釈もまた、人種と階層の関係についてステレオタイプ像の適用した読みであると言える<sup>5)</sup>。Morrisonの意図は、読者自身に自分の読みに含まれる人種と階層的コードの恣意的な結び付きに気付かせる点にあったのであり、Schappellとのインタビューの中で、“Recitatif”において階層的コードは用いたが、人種的コードを排除した理由について次のように述べている。

“... to provoke and enlighten [the reader]. . . . Soon as I say, ‘Black woman . . .’ I can rest on or provoke predictable responses, but if I leave it out then I have to talk about her in a complicated way—as a person.” (Schappell, 75)

TwylaとRobertaの階層の違いは、1度目の再会では目立ったものではないが、2度目の再会で決定的に顕著なものとなる。しかし、その差異は、例えば、“celebrity”と“ghetto”といった図式化された対比によって描出されるのではなく、アッパーミドルと労働者階級間の微妙な階層間の差異として描かれる。こうした階層の違いは、彼らの人種的相違によって裏書きされるものではない。両者はそれぞれ個として人種的に対立するわけではないが、かれらの意志とは関わりなく、人種間の緊張関係が背景化された中で出会いを繰り返すことになる。

St. Bonaventure 保護院での出会いから8年後、二人はTwylaが働くレストラン、Howard Johnson’sで店員と客として最初の再会を果たす。Twylaは生活に密着し、夜はまだしも朝になると店内のいたるところに傷みがあって、ややみすぼらしく見える店でウェイトレスをしている。これに対し、Robertaはいわば「モラトリアム」の最中と言える。おそらくはアフロヘアで、Jimi Hendrixに代表されるヒッピームーヴメント、つまり時代の最先端の流行を敏感に取り入れる女の子に成長している。最初の再会では、TwylaとRobertaの間には目に見える親しさもなく、よそよそしい感じを醸し出している。それから12年後、TwylaはNew York州北部のNewburgh近郊に新しくできたFood EmporiumでRobertaと2度目の再会を果たす。この時、両者の階層の差異は明確なものとなっている。地方都市の比較的旧家、しかし労働者階級で消防士をする夫と子供、義理の父や母といった大家族に囲まれ、Twylaは暮らしている。その暮らし向きはアイスクリームを買うにもすこし自分に言い訳しているように、決して裕福というには当たらない。これに対し、RobertaはIBMのコンピューターエンジニアの夫と結婚し、4人の連れ子とともに、NewburghとはHudson川をはさんで対岸の新興エグゼクティブが住む町、Annadaleに移り住んできている。Robertaの車には中国人と思われる運転手が付いており、また家には召使いの者が2名いる。最初の再会の時とは違って、2度目の再会の時には、両者は昔話に花を咲かせ、かつてSt. Bonaventure保護院で互いが感じた「親和性」を一時的に取り戻し、「姉妹のように」接する。

“I tried to think why we were glad to see each other this time and not before. Once, twelve years ago, we passed like strangers. A black girl and a white girl meeting in a Howard Johnson’s on the road and having nothing to say. One in a blue and white triangle waitress hat—the other on her way to see Hendrix. Now we were behaving like sisters separated for much too long.” (253、筆者強調)

TwylaとRobertaの階層的差異、経済的立場の違いは、2度目の再会時に顕著なものとなるが、Twyla

の語りでは、常に両者の「衣装」、ドレスや装飾品など身につけるものの対比で描写される<sup>6)</sup>。

Howard Johnson's での出会いでは、Twyla はレストランの「制服」(“the blue and white triangle on my head, my hair shapeless in a net, my ankles thick in white oxfords” (250)) を身につけているのに対し、Roberta は 60 年代のヒッピームーブメントの流行に乗った最新ファッションに身を包んでいる (“Her own hair was so big and wild I could hardly see her face. . . . She had a powder-blue halter and shorts outfit and earrings the size of bracelets.” (249))。Twyla の「制服」、Roberta の流行のファッション、これらは演劇などにおいて「衣装」が登場人物の役割や性格を象徴するのに用いられるのと同様、“Recitatif” においても Twyla、Roberta の「衣装」は、それぞれの役割、性格を示す記号として機能している。2 度目の再会、IBM のエグゼクティブとの結婚でアッパーミドル階級へと登った Roberta の「衣装」は、その機能の好例となっていると考えて良い。Twyla を見つけて声を掛けた Roberta について、Twyla の最初の描写は、“the woman leaning toward me was dressed to kill. Diamonds on her hand, a smart white summer dress.” (251) であり、Food Emporium に併設されたカフェに落ち着いた Twyla は Roberta について、あらためて次のように語る。

“. . . her huge hair was sleek now, smooth around a small, nicely shaped head. Shoes, dress, everything lovely and summery and rich. I was dying to know what happened to her, how she got from Jimi Hendrix to Annandale, a neighborhood full of doctors and IBM executives. Easy, I thought. Everything is so easy for them. They think they own the world.”  
(252、筆者強調)

Twyla と Roberta の階層の違いとともに、ここで強調しておかなければならないのは、“what happened to her” と語る Twyla の Roberta の「変化」への驚きに象徴されるように、階層、およびそれをコード化した記号としての「衣装」は、交換可能であり（着替えることができ）、変化するという点にある。自身の立場の変化を自覚して、Roberta も実際に “And I was a small-town country dropout. God, were we wild. I still don't know how I got out of there alive.” (253) と述べている。一方、“Everything is so easy for them.” と語る Twyla の Roberta の変化への反応は、人種間の緊張関係について読者をして深読みさせるが、労働者階級に属する Twyla の立場からの Roberta の階層の変化、二人の間に広がる経済的格差に対する台詞として理解するのが妥当のように思われる<sup>7)</sup>。

Twyla と Roberta の間に個人的な人種間の緊張関係は見いだせないし、実際に彼らが人種的に対立することはない。しかしながら、二人がさまざまな時代背景で再会を繰り返す中、両名の個人的な関係とはまったく関わりなく、人種間の緊張関係が空気のように存在するのも確かである。Howard Johnson's での最初の再会について、Twyla は Roberta の見せた「よそよそしさ」について、“you acted sort of like you didn't want to know me then” と尋ねると、Roberta は、“you know how it was in those days: black—white.” (255) と答えて、公民権運動が盛んな当時、白人と黒人との間には一定の距離感のようなものがあり、Twyla と Roberta との間に友情、絆といったものがあったとしても、それをあからさまに見せることにはためらいがあった、そんな時代だったのだ、と説明する。これに対する Twyla の感じ方は真逆であって、次のように語る。

“I thought it was just the opposite. Busloads of blacks and whites came into Howard

Johnson's together. They roamed together then: students, musicians, lovers, protesters. You got to see everything at Howard Johnson's and blacks were very friendly with whites in those days." (255)

Kelly Lynch Reames は、両者の認識の違いを “This difference, at least partly, amounts to insider / outsider status” であると指摘した上で、“Roberta, dressed as a hippie, on her way to her friend's audition with Jimi Hendrix, sees the conflicts from the inside; Twyla observes the changes in race relations from her position as a waitress in a road-stop restaurant.” (Reames, 139、筆者強調) と述べて、両者の立場の違い (“a hippie” と “a waitress”) による認識の差異であると鋭く指摘している。さらに指摘しておく、人種を異にする Twyla と Roberta はいずれも人種的緊張関係のあくまで「観察者」 (“insider / outsider” の違いはあったとしても) にすぎないのであり、時代の緊張感、空気のようなものを認めつつもその評価は両者の間で分かれているように、Twyla と Roberta は人種的対立、緊張関係の「当事者」として、互いに対立することはないのである。

### 3

人種も階層も異なる Twyla と Roberta にあって、人種的対立や階層間格差がどのように関連付けられているか、ここまで検討してきたことを改めて人種、階層を表すコード、身体（特に肌の色、「黒さ」と「衣装」の対比とそのアナロジーからまとめておこう。交換可能な（着替えられる）「衣装」の特性と、交換不可能な肌の「黒さ」の対比は、Twyla と Roberta の再会を通じて明らかになる両者の階層間格差をもたらす Roberta の階層的可変性と、狂気の中でしか「青い眼」を得ることができない *The Bluest Eye* の Pecola の悲劇にみられる人種的コードである身体の交換不可能性の対比として検討した。また、「衣装」が人物の（一時的な）役割、（社会的）立場などを指し示す記号として機能する点（まさにこの点で「衣装」は階層的コードである）に着目すると、Twyla や Roberta の階層を表すコードは、決して人物の人種的アイデンティティを指し示すものにはならないこと、その際、二人の階層間格差が Twyla をして鬱積した感情を喚起する時ですら (“Everything is so easy for them.”)、そこに人種間対立をみてとることができないことも確認した。この点については、さらに Twyla と Roberta の 3 度目の再会、強制バス通学制度に賛成、反対するピケ場面について検討を加えておいても良いだろう。

Twyla と Roberta の 3 度目の再会の場面、Twyla は人種分離撤廃を目指す強制バス通学制度に反対するデモに出くわし、その中に Roberta の姿を見いだす。Twyla の息子 Joseph はバス通学児童のリストに入っているが、“Joseph was on the list of kids to be transferred from the junior high school to another one at some far-out-of-the-way place and I thought it was a good thing until I heard it was a bad thing. I mean I didn't know.” (256) というように、Twyla は認識不足からか、あるいはそもそも教育制度やその背景となっている人種問題に関心が薄いためか、強制バス通学問題に当事者意識がなく、“MOTHERS HAVE RIGHTS TOO!” (256) と書いた看板を掲げて、制度に反対する Roberta の行動がよく理解できない。互いに “I wonder what made me think you were different.” (256) と言い合い、Roberta が反対派であったことから、Twyla は “AND SO DO

CHILDREN\*\*\*\*” (258) と書いた看板を掲げて、賛成派のピケに参加する。

“Recitatif” において、人種の異なる Twyla と Roberta が最も人種問題に関連して、対立する場面であるが、強制バス通学制度が白人層からも黒人層からも批判されたし、富裕層にも低所得者層にも反対者がいたことと考え合わせると、バス通学制度に反対する Roberta の立場は、彼女が属する階層が要求するものであるのか、あるいは人種的な立場（白人であるか黒人であるかを問わず）が要求するものか、はっきりしない。ここでは Twyla と Roberta の立場の相違、対立関係だけがクローズアップされており、しかも二人の対立は、二人にしか分からないメッセージを掲げることでよりパーソナルの性質のものに変容してしまい（例えば “IS YOUR MOTHER WELL?” (259) など）、当事者として人種間対立に参加するという構図から逸脱してしまう。このパーソナルな「対立関係」は、両者の出会いから繰り返される再会の物語を通じて常に背景となってきた Maggie 虐待事件のエピソードに着地し、ここにいたって Maggie の人種的アイデンティティの問題をともなって、ハイライトを迎える。そこで最後に、「衣装」が身体を覆う性質のものであること、しかしそのすべてを包み隠すこともできない点に着目し、Twyla と Roberta の階層間格差が、両者の異なる人種関係を希薄にする点、しかし Maggie 虐待事件の謎に拘泥する Twyla と Roberta の関係には人種間の緊張関係が背景化されている点について検討する。

すでに指摘したように、2度目の Food Emporium での再会時から Twyla と Roberta の階層の違いは、両者の「衣装」の違い、特に Roberta の高価なドレスや装飾品の類から明らかである。4度目となる最後の再会の場面、Twyla の息子 Joseph が大学に通う年齢となっていることから、強制バス通学に反対するピケで反目しあった時から数年が経過しているが、Twyla は “a silvery evening gown and dark fur coat” (260) を身にまとった Roberta と出会う。Twyla と Roberta の階層間格差が前景化されている分だけ、両者の人種的差異の意味は少なくとも当事者同士では重要視されていない。階層間の格差が人種間の緊張関係を二次的なものに見せてしまうのである。というのも、明確な階層間の格差を示しながら、Twyla と Roberta の間には共有される幼少時代の記憶、他の誰とも共有していない、二人だけの記憶により、人種はもちろんのこと、階層の違いも越えて絆が存在するからである。この記憶はトラウマ的なものであり、St. Bonaventure 保護院の台所で働いていた Maggie に関わっている。

Twyla は、“Recitatif” の最初で St. Bonaventure 保護院で過ごした日々のことをよく夢で見たのだと語るが (244)、保護院に併設されていた果樹園の記憶、その果樹園で「転んだ」Maggie のことについて、“I don't know why I dreamt about that orchard so much. Nothing really happened there. Nothing all that important, I mean. . . . Maggie fell down there once.” (244-45、筆者強調) と語る。果樹園での出来事の何が引っかかっているのか、Twyla は「分からない」という。ここでは前後の脈絡がなく、“Maggie fell down” と語り、後の Maggie 虐待に関する Roberta とのやり取りの導入部分となっている。Roberta との再会の中で、Maggie に果樹園で何があったかは繰り返し話題となるが、2度目の Food Emporium での再会では、Twyla の Maggie は「転んだ」という記憶を修正して、Roberta は “Those girls pushed her down and tore her clothes.” (254) と語り、保護院にいた年長の女の子たち (“gar girls” (253)) が Maggie を「押し倒した」のだと述べる。3度目の再会、ピケで両者が対立する場面にいたって、Roberta は “you kicked her. We both did.” (258) と Maggie の虐待について、自分と Twyla の関与を語る。最後の4度目の再会の前後では、Twyla は “I didn't kick her . . . I sure did want to.” (259) と語り、Roberta もまた、“We didn't kick her. It

was the gar girls. . . . But, well, I wanted to. I really wanted them to hurt her.” (261) と Twyla に告白する。

Twyla と Roberta が他の誰にも言うことができず、トラウマ記憶として抱えていた Maggie に関する記憶は、保護院にいた “gar girls” による Maggie の虐待と、それを目撃した二人の心理に関わっていることが二人の繰り返しの再会を通じて徐々に明らかになっていく。Maggie 虐待に関して二人は当事者ではなかったが、ただの傍観者でもなく、自分たちにも Maggie を「蹴りつきたい」という欲望があったのだと自覚するにいたる。多くの批評家が指摘しているように、この二人の欲望はそれぞれの不完全な母との関係と結びついている。Twyla の母 Mary も Roberta の母も、自分の娘を養育せず（あるいはできず）、本来の役割を果たすことができていない<sup>8)</sup>。Maggie は二人にとって身近にいた、役割を果たさない母の代理表象であって、Twyla をして “Maggie was my dancing mother.” (259)、Roberta には “She’d been brought up in an institution like my mother was and like I thought I would be too.” (261) と語らせるのである。Twyla と Roberta を結びつけていたのは、両者の間の「同一」の部分であって、Twyla が “Those four short months were nothing in time. Maybe it was the thing itself. Just being there, together.” (253) と述べるように、同じような母を持ち、寂しさや不安と一緒に耐え、誰にも語ることでできないトラウマ記憶をともにかかえているという点にかかっている。St. Bonaventure 保護院でともに過ごした “Those four short months” の記憶は二人の人種の違いはもちろんのこと、階層間格差さえも二次的で取るに足りないものに見せるのである。

Maggie に関するエピソードには、人種に関わる主題も背景化されている。Twyla と Roberta の差異は、明確な階層間格差として前景化されており、そのために両者の人種的差異はそれほど重要な物語のファクターではないように見えたとしても、“Recitatif” に書き込まれた人種間の緊張関係を「完全」に覆い隠すことはできない。Twyla は物語の始めに、その必要もないのにあえて Maggie の肌が “sandy-colored” (245) であると語り、Maggie の人種的アイデンティティが重要であるかも知れないと読者に思わせてしまう。強制バス通学反対のピケの最中、言い争いの間に Roberta は “You’re the same little state kid who kicked a poor old black lady” (257) と Twyla を非難するが、ここで初めて Maggie が黒人であることがほのめかされる。Twyla は Maggie が黒人であったかどうか記憶が曖昧であったが (259)、物語の最後には Roberta も “I really did think she was black. I didn’t make that up. I really thought so. But now I can’t be sure.” (261) と語り、自身の以前の発言を撤回し、なおかつ、やはり記憶が曖昧であると述べる。Maggie は “Recitatif” の中で、その人種的アイデンティティが問題となり、かつ決定できない唯一の登場人物である。黒人作家 Morrison が書いた、人種を異にする二人の主人公の間で絶えず話題となる人種的アイデンティティが曖昧な Maggie に読者は当然、なんらかの人種問題に関わる主題、あるいはメッセージを期待し、また、その意味を「読み込もう」とする。ところが実際のところ、Maggie が白人であるか、あるいは黒人であるかは、Twyla や Roberta のトラウマ記憶とは直接関係性を持っていない。Maggie 虐待事件に関する二人の関わりには、両者の母娘関係に起因する代償行為の要素が含まれているが、これもやはり Maggie の人種的アイデンティティは関わりがないように思える。まるで表層の Twyla と Roberta、そして Maggie の物語の深層部では、Twyla や Roberta の出会いと再会の物語以外の別の物語が進行しているかのようである。“Recitatif” の創作について “provoke and enlighten [the reader]” と Morrison が述べているように、その「深層」の物語を読み、人種問題について考えよ、

と読者に促しているように思われる。

## 注

- 1) Toni Morrison, *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination*. 1992. New York: Vintage Books, 1993: xi.
- 2) Toni Morrison, “Recitatif.” In *Confirmation: An Anthology of African American Women*. Eds. Amiri Baraka (LeRoi Jones) & Amina Baraka. New York: Quill, 1983: 243-61. “Recitatif” からの引用は本文中の括弧内にページ数のみで記す。
- 3) 本稿では Twyla と Roberta の人種的アイデンティティについては決定不可能であるとの立場から、その議論には参加しないが、多くの批評家が詳細なコメントを寄せている。Elizabeth Abel, “Black Writing, White Reading: Race and the Politics of Feminist Interpretation.” (1993) の他、Juda Bennett (2001), David Goldstein-Shirley (1997), Kathryn Nicol (2002), Ann Rayson (1996) などを参照。Abel 自身が、“Recitatif” の中に散りばめられたさまざまなコード、例えば階層や政治的立場、文化的傾向などの違いを批評家（読者）自身が（無意識に）人種的コードとして読み込み、Twyla や Roberta の人物像の中に人種的ステレオタイプ像を見て取ってしまう危険があることを認めている。この点については Abel 他、Burrows (2004), Reames (2007), Seshadri-Crooks (2000), Wyatt (2011) などを参照。また、白人である Abel は、Twyla と Roberta の人種的アイデンティティを示唆するのに、自身の白人としての読みを、同僚の黒人フェミニスト批評家、Lula Fragg の黒人としての読みと並置することで議論を展開する手法を取っているが (Abel, 474-76)、Burrows は Morrison が “Recitatif” から人種的コードを取り除こうとした意図を汲んで、Abel の手法を “a replication of the divisive racial politics I think Morrison is trying to undo” (Burrows, 203) であると指摘している。
- 4) 図式的な人種間対立、あるいは定式化した人種的ステレオタイプ像を表現する言語を用いない点について Morrison は Schappell とのインタビューの中で、“Soon as I say, ‘Black woman . . .’ I can rest on or provoke predictable responses, but if I leave it out then I have to talk about her in a complicated way—as a person.” (Schappell, 75) と述べている。
- 5) Abel, 476; Baillie, 166; Reames, 133; Seshadri-Crooks, 146; Smith, 97 などを参照。Seshadri-Crooks は、“the contents of class identity here do not function as clues to racial identity” (Seshadri-Crooks, 146) とまで言い切る。Reames は Morrison の意図を、“By carefully manipulating economic markers and bodily descriptions, Morrison creates a matrix of class, race, and bodies that highlights our tendency to read race as class and to attribute meanings to physical bodies.” (Reames, 133) と指摘している。
- 6) 例えば、*The Bluest Eye* の場合においても、Kubitschek は “Maureen enjoys her middle-class status, signified most clearly by her new clothing in a neighborhood where almost all children wear hand-me-downs.” (Kubitschek, 37) と指摘している。
- 7) “Overall, their experience in the shelter is one of togetherness and sameness, but their subsequent meetings are dominated by their differences, which are cultural and economic and only secondarily connected to race.” (Reames, 134) 参照。
- 8) Maggie による Twyla, Roberta の母の代理表象については多くの批評家が指摘しており、“a hated reminder of their unresponsive mother”、“the mute Maggie as her own unresponsive, rejecting mother” (Abel, 472, 495)、“a vessel who symbolizes the absence of a mother figure” (Baillie, 168)、“a warped mother figure who fails to respond Twyla’s and Roberta’s needs to be nurtured.” (Fultz, 24)、“racially indeterminate Maggie as a mother figure” (Rayson, 45) を参照。

## 参考文献

- Abel, Elizabeth. “Black Writing, White Reading: Race and the Politics of Feminist Interpretation.” *Critical Inquiry* 19 (Spring 1993): 470-98.
- Angelo, Bonnie. “The Pain of Being Black: An Interview with Toni Morrison.” In *Conversations with Toni Morrison*. Ed. Danille Taylor-Guthrie. Jackson: University Press of Mississippi, 1994: 255-61.

- Baillie, Justine. *Toni Morrison and Literary Tradition*. New York and London: Bloomsbury, 2013.
- Bennett, Juda. "Toni Morrison and the Burden of the Passing Narrative." *African American Review* 35.2 (2001).  
<http://www.questia.com/read/1G1-77828277/toni-morrison-and-the-burden-of-the-passing-narrative> (accessed on July 31, 2007). N. pag.
- Burrows, Victoria. *Whiteness and Trauma: The Mother-Daughter Knot in the Fiction of Jean Rhys, Jamaica Kincaid and Toni Morrison*. New York: Palgrave Macmillan, 2004.
- Fultz, Lucille P. *Toni Morrison: Playing with Difference*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2003.
- Goldstein-Shirley, David. "Race and Response: Toni Morrison's Recitatif." *Short Story* 5.1 (Spring 1997): 77-86. <http://www.bookrags.com/studyguide-recitatif/essay2.html> (accessed on April 21, 2007). N. pag.
- Kubitschek, Missy Dehn. *Toni Morrison: A Critical Companion*. Westport, Connecticut, and London: Greenwood, 1998.
- Morrison, Toni. *The Bluest Eye*. 1970. New York: Alfred A. Knopf, 1993.
- . *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination*. 1992. New York: Vintage Books, 1993.
- . "Recitatif." In *Confirmation: An Anthology of African American Women*. Eds. Amiri Baraka (LeRoi Jones) & Amina Baraka. New York: Quill, 1983. 243-61.
- Nicol, Kathryn. "Visible Differences: Viewing Racial Identity in Toni Morrison's *Paradise* and 'Recitatif.'" In *Literature and Racial Ambiguity*. Eds. Teresa Hubel and Neil Brooks. Amsterdam and New York: Rodopi, 2002: 209-31.
- Rayson, Ann. "Decoding for Race: Toni Morrison's 'Recitatif' and Being White, Teaching Black." In *Changing Representations of Minorities East and West*. Eds. Larry E. Smith and John Rieder. Honolulu: University of Hawaii Press, 1996: 41-46.
- Reames, Kelly Lynch. *Women and Race in Contemporary U. S. Writing: From Faulkner to Morrison*. New York: Palgrave Macmillan, 2007.
- Schappell, Elissa. "Toni Morrison: The Art of Fiction." In *Toni Morrison: Conversations*. Ed. Carolyn C. Denard. Jackson: University Press of Mississippi, 2008: 62-90.
- Seshadri-Crooks, Kalpana. *Desiring Whiteness: A Lacanian Analysis of Race*. New York and London: Routledge, 2000.
- Smith, Valerie. *Toni Morrison: Writing the Moral Imagination*. Hoboken, NJ: Wiley-Blackwell, 2012.
- Wyatt, Jean. "Love's Time and the Reader: Ethical Effects of Nachträglichkeit in Toni Morrison's *Love*." In *Toni Morrison*. Ed. Harold Bloom. New Edition. New York: Bloom's Literary Criticism, 2011: 171-203.

(海技大学校航海科准教授)